

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2013

課題番号：20330034

研究課題名(和文) 国際規範の競合と複合化についての比較研究

研究課題名(英文) Comparative Study on Contestation and Complexity of Norms

研究代表者

西谷 真規子(NISHITANI, MAKIKO)

神戸大学・国際協力研究科・准教授

研究者番号：30302657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,700,000円、(間接経費) 4,410,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、国際規範の発展における規範間の競合または複合のプロセスを明らかにすることを目的とした。グローバル、リージョナル、ナショナルの各レベルにおいて、規範的アイディアの競合や複合が、どのような制度変化をもたらすか、多様な行為主体(国家、国際機構、市民社会、企業等)が競合または複合の過程にどのように関わっているか、または、競合や複合から生じる問題をどのように調整しているか、の二点を中心的な問いとして、事例分析を行った。成果は、国際・国内学会発表や論文発表を通じて逐次公開した。最終的には、編著『国際規範の複合的発展ダイナミクス(仮題)』(ミネルヴァ書房)として近刊予定である。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at eradicating contestations or complexity of norms in a norm development. Our case studies centered on two questions: 1. What kind of institutional changes are caused by contestations or complexity of norms; 2. In what process do multiple actors (nations, international organizations, civil society, cooperations, etc.) get involved in contestations or complexity of norms, or coordinate problems associated with contestations. We presented our findings at major international and domestic conferences, as well as published papers. We are also scheduled to publish an edited book in the near future.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：国際規範 国際政治 トランスナショナル コンストラクティヴィズム グローバル・ガバナンス
政治学 国際レジーム論

1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景と、先行研究と比較した本研究の特徴について述べる。

絶え間なき闘争を前提とするホブズ的世界観へのアルタナティヴとして、「規範」は国際政治・国際関係において最も古い論点の一つである。現実主義と自由主義の対立は、アナキーな国際関係におけるアクターの行動を抑制するものとしての規範の機能、効力、内容をめぐる見解の相違に起因するといっても過言ではない。

これに対して、コンストラクティヴィズムやポスト構造主義など社会学を源流とする学派は、規範と主体とが相互に構成しあう関係にフォーカスすることで、アナキー下における規範の規制的作用という伝統的対立軸を回避した。彼らの議論は、主体のアイデンティティや行動パターンを構成する規範の作用と、主体が相互主観的に規範を形成する局面とを同時に射程に置いたものである。とりわけアレクサンダー・ウェントをはじめとする一群のコンストラクティヴィストたちは、アナキー自体が主体の規範的解釈を通して機能するものであり、国際関係における中央政府不在という同一条件下であっても、解釈によって主体のアイデンティティや行動パターンは変化しうると論じて学界に波紋を投じた。

本プロジェクトは、秩序をめぐる多様な規範的解釈・言説が併存するというコンストラクティヴィスト的前提を継承しながら、各規範が形成され発展していく局面に焦点を絞る。規範の形成・発展・進化(拡散/遵守/受容を含む)はコンストラクティヴィズムの主たるテーマの一つであり、このテーマを扱った先行研究は、コンストラクティヴィズムの特徴である構造と主体の相互構成性の論理を前提とし、規範受容と制度化の程度の時系列的变化過程を説明する。

しかし、その嚆矢とされるマーサ・フィネモアとキャスリン・シキンクによる規範のライフサイクル・モデルは、規範の発展過程を過度に単純化しており、重要な論点を不問に付している。本プロジェクトでは、個別規範のポリシー・サイクル(アジェンダ設定・政策形成・履行・フィードバック)と、人権や環境保護などの原則的規範の生成・普及・国内化の過程の双方を対象として、ライフサイクル・モデルでは論じられなかった諸論点、すなわち、多様な関係性；政策形成以降のトランスナショナル・アクターの関与；トランスナショナル・アクターと国内アクターとの関係性；グローバル規範形成における地域の役割に重点を置いて論じている。これにより、より多元性・多様性に重点を置いた規範発展過程を描くことを目指しているのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国際秩序を制御する基盤となる国際規範がどのように形成され進

展・変容していくかを解明することである。国際秩序、とりわけグローバル・ガヴァナンス秩序を支えるものとしての国際規範(この意味では「グローバル規範」と呼称されることも多い)の重要性については、国際関係論の主要テーマとしてこれまで繰り返し論じられてきた。しかし、現代の錯綜した国際関係における国際規範、就中グローバル問題群に関わる規範の形成・発展過程は複雑であり、単純なモデルによって画一的に説明できるものではなく、また逆に、一つの事例を簡単に一般化できるものでもない。

その理由は大きく三つに分けられる。第一に、関与主体の多様性のためである。国家だけでなく非国家主体や国際機構、地域機構が、規範の策定および履行に実質的に参与する事例が増えている。とりわけ、「私的」主体である NGO および企業が国際「公共」政策の形成に関与することが多くなり、国家のみを正統な規範形成主体と捉える見方は現実に妥当しなくなってきた。また、合意形成の手法自体に、「マルチ・ステークホルダー・プロセス(MSP)」に代表されるような、多様な属性と専門の主体による対等な議論を軸とした水平的な合意形成・意思決定システムが採用され事例も見られるようになってきた。このため、非国家主体の関与メカニズムや、規範策定主体としての正統性等の論点は、近年議論の多いところである。

第二に、争点領域間の相互作用や、同一争点領域における制度間の相互作用によって、規範間に競合や補完関係が生じるからである。人権分野と人道分野の相乗関係、開発と人権、環境と人権、安全保障と環境、主権と人権の競合等、異分野間の相互作用が、規範の変容に大きな影響を及ぼしている。また、同一争点領域内でも、競合するレジームや規範体系が存在し、その調整のメカニズムが重要な論点としてクローズアップされている。

第三に、グローバル、リージョナル、ナショナル、サブナショナルの各政治アリーナ間の連動により、マルチ・レベルでの規範形成・発展がみられるからである。例えば、人権規範の発展における EU や CSCE の役割、人間の安全保障規範の発展における日本政府の役割等、グローバル・レベルでの規範の進展が地域や国家レベルでの規範形成と密接に関連している例は枚挙に暇がない。

以上のような、複雑で複合的な国際関係の実相を的確に捉えるにはどうすればよいか。この点は、グローバル・ガヴァナンス論の問題関心と重なる。現代は複合的グローバル・ガヴァナンスが増えてきているが、複合的グローバル・ガヴァナンスとは、問題領域、方法、主体が多様である問題解決制度であり、国際政治過程の多様化、すなわち、争点領域、アイデア、主体、ガヴァナンス・レベル、ガヴァナンス方式、法制度形式の多様性の結果でもある。

複合的グローバル・ガヴァナンスの主要な

論点は、二点に集約される。第一は、多様性の調整がいかに行われるかということである。グローバル・ガヴァナンスの各構成要素における関係性（競合・機能的補完・相乗・序列・包摂等）と、そのメカニズムの特定が主要な分析対象となる。ここで構成要素には、以下を含む：規範・アイデア；ガヴァナンス・レベル（サブナショナル、ナショナル、サブリージョナル、リージョナル、グローバル）；ガヴァナンス方式（序列制、非序列制、集権制、分権制）；主体のアイデンティティ（属性：公・私、セクター、民族、宗教、社会階層、出身地、ジェンダー等）；法制度の拘束力（ソフトロー、ハードロー）。

第二は、新たな複合領域の形成によるグローバル・ガヴァナンスの変容メカニズムである。「環境」「開発」など、今まで上位概念ではくくられなかった争点が結び付き、新たな争点領域を形成する。「腐敗防止」と「CSR」のように、争点領域にあらたな争点加わるものもある。その複合過程における主体と方法上の特徴が主要な分析対象となる。

本プロジェクトは、国際関係論・国際政治学を中核とした最新の理論的知見と多様な事例研究を用いて、以上の問いに多角的に答えようとするものである。

3. 研究の方法

本報告書では、国際規範の形成過程を、異なる規範・制度・アクター・地域間の競合/相補・相乗関係を軸とした複合過程と捉えることで、前項で述べた諸論点をカバーする理論的視座を与えながら、規範の選抜過程と、アクターや統治レベルの多様性に照準を絞りながら、多角的に検討する。この目的のために、リジッドなモデルを事例研究によって検証するという形ではなく、フレームワークを共有しながら複合的な側面を多様な角度から論じることで、全体として複合的發展の実態が重層的に立ち上がってくることを目指している。

リサーチ・フレームワークは、規範間関係の概念と、リサーチ・クエスチョンによって構成される。

(1) 規範・制度間関係の種類

・競合性 contestation

・相乗性 synergy：異なる規範体系同士が相互に強化し合う、新たな規範の創出や、別の問題にも波及するプラス効果を持つ。制度の深化と拡大をもたらす。環境と腐敗など、異なるガヴァナンス・システムが相互に効果を高め合う。

・相補性・補完性 complementarity：法の欠缺を補う。現行の法体系では規制されない部分を補完する。現行制度内での深化をもたらす。

・序列性 hierarchy：規範の上位・下位を定義。どちらが優先されるか。不介入原則と人間の安全保障規範など。序列の変化が、秩序

の変化と連動する。

・包含性 inclusiveness：上位規範が下位規範を包含する。

・重複性 overlap

上記のうち、競合性・相補性・相乗性は規範の発展を促す関係性である。補完性と相乗性は似ているが、補完性が予想される完成系の不足分を補うことを意味し、その効果は、予め想定された範囲に限定されるのに対し、相乗性は、予想以上のプラスの効果をもたらすことを意味する。したがって、その効果も無限定である。既存の方法では対応できないような問題に革新をもたらす可能性があるため、グローバル・ガヴァナンスの問題解決効率を上げるには、補完効果だけでなく相乗効果をもたらすことが望ましい。

(2) リサーチ・クエスチョン：

本プロジェクトに通底する根本的な問いは、二点ある。第一に、規範が功利的利益と競合する場合に、規範が選好されるのはどのような条件下にあるときか。第二に、規範の影響が拡大・深化する方向で発展するメカニズムはどのようなものか。この問いを多面的に検証するために、グローバル・ガヴァナンスの構成要素間の関係性と連関メカニズムを特定する：

異なるガヴァナンス・レベル（グローバル、リージョナル、ナショナル、サブ・ナショナル等）間にどのような関係性があるか。一国の問題が地域の国際規範に発展する等、地理的拡大（国際化）があるか。グローバルな問題が一国内の政策に影響するといった地理的凝集（国内化、地域化）のダイナミズムがあるか、等。

異なるアクター（国家、非国家、トランスナショナル、国際機構等）間にどのような関係性があるか。

異なる制度形式（パブリック・レジーム、プライベート・レジーム、ハードロー、ソフトロー等）間にどのような関係性があるか。

異なる争点領域、または同一争点領域内の異なるアイデア間にどのような関係性があるか。

～ の各側面相互を連関させるメカニズムがあるか。例えば、トランスナショナル・アクターがマルチ・レベルを繋ぐ；国際機構・地域機構がガヴァナンス・レベル間の競合の調整機能を担う；国家主体がハードローを好むのに対し非国家主体がソフトローを好する、等。

～ で競合性が見られた場合、その調整メカニズムは何か。また、補完性・相乗性が見られた場合、それをもたらすメカニズムは何か。

上記フレームワークに基づき、代表者・分担者が各自の専門にあわせた手法と事例を用いて事例分析を行った。主権国家システム

の変容を背景テーマとするため、規範形成の主たるアリーナ（ガヴァナンス・レベル）毎に分担者を配置した（グローバル・レベルは庄司真理子と西谷真規子；リージョナル・レベルは杉田米行と宮脇昇；ナショナル・レベルは高橋良輔が担当）。これにより、各アリーナの規範形成過程をミクロに捉えると同時に、マルチ・レベルの相互作用によって各レベル内での規範形成が影響を被るマクロ・ダイナミズムを俯瞰する効果が期待できる。

事例としては、人道、人権、企業の社会的責任（CSR）、腐敗防止、紛争予防、平和構築、保護する責任、援助規範、民主主義、自由主義等、広範な争点領域を扱うことで、パイアスがかかりにくいように意識した。

4. 研究成果

上述フレームワークに基づき、事例ごとに構成要素間の関係性と、連関メカニズムを検討した。各事例分析から得られた知見は主に以下のとおりである。

（1）規範の発展過程におけるトランスナショナル・アクターの役割

国際規範の政策サイクルに関与する NGO 等のトランスナショナル・アクターは、広範な機能を果たす。規範起業家としてアジェンダ設定に主導的な役割を果たす以外にも、認識共同体として政策内容を策定したり、市民社会ネットワークを形成し監視活動やキャンペーンを通じて履行を促進したりもする。

しかし、履行促進段階における NGO の役割は、十分に理論化されているとは言い難い。国内化のための議論を主導する役割が中核となると論じられるだけで、どのような条件下で（国家体制、政治文化、市民社会の成熟度等）、どのような戦略・戦術が用いられて規範の国内化がなされるのか、についての研究は手薄である。また、履行段階のネットワークの機能的特徴についても理論的な整理は進んでいない。

ナショナル規範と国際規範の媒介

日本の援助政策過程において、NGO が、国際規範を国内政治に媒介する役割を果たすことが明らかにされた。コーポラティズム国家である特質を生かし、NGO は対決の政治よりは対話と融和の政治を志向し、自身はあくまでも媒介者として規範を接ぐ黒子的な役割に徹する。NGO が政府に対抗する社会勢力の主力として前面に立つのとは対照的な構図であるといえる。

国家が国益の増大を目的として対外政策を展開するウェストファリア・システムにおいては、国益と国際規範は根本的な緊張関係を孕んでいるため、政府と敵対して非難することで、規範の国内化を膠着化させることにもなりかねない。本研究で示された「媒介者」の概念は、規範の国内化過程に新たな視点を付加するものと思われる。

多様性の調整と規範の複合化促進

規範形成過程が多元化すれば、競合の可能性も高くなる。競合を調整するには、事前の紛争回避と事後の紛争解決のメカニズムが必要である。本プロジェクトでは、競合の事前調整と規範の複合化を促進するトランスナショナル・ネットワークである「ハイブリッド多中心ネットワーク (Hybrid Advocacy Network=HPN)」モデルが提示され、グローバル腐敗防止ガヴァナンスにおいて検証された。

HPN は多様なアクター間の相乗的協働と、多面的・多中心的なマルチ・ネットワークの統治構造によって特徴づけられる。規範の履行を促進するトランスナショナル・アドボカシー・ネットワークと、専門家による規範形成ネットワークである認識共同体の両方の特性を備え、エリートと民衆運動の溝（専門家と活動家、大手 NGO と草の根運動の対立構造）を架橋する機能を果たす理念型モデルである。

腐敗防止の領域では、各地域、国家、グローバルの各統治レベルで法制化がなされている。法制間には、政治社会的条件に応じた多様性のために、競合が生じる可能性が高いが、実際には、各制度は意図的に調和され、深刻な競合が起きないように調整されている。また、自律的なメンバー間で、ゆるやかな分業に基づいた協働が行われることで、水面下で調整が為され、紛争を未然に回避する機能も果たしている。

腐敗防止ガヴァナンスは、専門家と国家、国際機関が主導してきた同質的なレジームであり、トランスナショナル・ネットワークも、認識共同体の側面が強かった。しかし、2000 年代初め頃から、企業による関与の拡大や運動の大衆化が進んできたため、多様化に相応しい分業と多中心構造の構築が求められている。企業の社会的責任（CSR）レジームとの連結、教育の重視、民衆へのアウトリーチ強化、開放的なネットワークの構築など、ハイブリッド化が模索されている。

同時に、環境や安全保障など他分野との連携も積極的に推進されており、グローバル・ガヴァナンスの複合化をもたらす要因となっている。

（2）グローバル政策過程における規範的アイデア間の競合および複合過程

人道、人権、開発、社会正義、環境等のグローバル問題群にかかわる争点領域では、争点領域の境界が変動する傾向が見られた。

・いわゆる「新しい戦争」に対応して、国内紛争への関与も含んだ新しい安全保障規範として注目されるようになった「紛争予防」と「平和構築」の規範概念は、時に競合したり、重複したり、相補関係にあったり、相乗効果をもたらすなど、時とともにその関係性を変容させながら発展してきた。現在は「平和構築」のほうが国連システム内で脚光

を浴びているが、両者の関係性に鑑みれば「紛争予防」を軽視するのではなく、両者の適切な使い分けを可能とする制度構築が必要だろう。

・腐敗はセクター間を横断し、争点領域を問わず蔓延する現象であるため、腐敗防止規範は、多様な争点と複合化して発展してきた。政府調達、公正取引、天然資源、教育、保健、貧困削減、気候温暖化、軍事・防衛等、その射程は多岐にわたる。もともと新自由主義的グッド・ガバナンスおよび公正取引の文脈でフレーミングされてきた腐敗防止規範であるが、近年は貧困削減や社会正義といった、反新自由主義的価値が強調される傾向がある。また、近年は環境および軍事・防衛との争点結合が戦略的に推進されている。気候変動と腐敗防止との連結によって、サステナビリティ向上の相乗効果が目指され、また、平和構築と腐敗防止との連結によって、紛争後秩序の安定・持続的平和の強化が期待されている。

このように、争点領域自体の機能的特性と、規範推進者による戦略的争点連結によって、グローバル・ガバナンスの境界が再編されている。

(3) 規範的競合が生じた場合の調整

同一争点領域において規範的アイデアが競合した場合、論理的には三つの解決策がありうる。一つは、どちらか一方のみが政策として採択されることである(選択排除)。功利的利益に基づいた政治的対立が規範的対立に反映している場合は、このオプションが採択されることが予想される。二つは、両者を差別化する制度が構築され、両制度間に明確な役割分担が敷かれることである(分業)。これには、垂直的協働(序列化)と水平的協働の二つの方法がある。三つは、両者の中間点をとることである(妥協)。

本研究の事例では、分業および妥協が観察された。

・紛争予防と平和構築の規範は、あるときは競合し、あるときは重複しながら発展してきたが、両者の間に序列がつけられることで、制度間の抵触が避けられている。しかし、役割分担は明確でなく、重複範囲が大きいため、非効率が発生している。

・第二次大戦後の米国の日本統治の事例では、反共主義的民主主義と経済的自由主義との妥協の産物として、抑制された軍事化路線がとられたことが明らかにされた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 9 件)

— Makiko Nishitani, "Coordination by Hybrid Advocacy Network Against Corruption," paper presented at the International Studies Association

Annual Convention, Toronto, March 26-29, 2014, pp1-30. 査読無 (abstract 査読有)

— 西谷真規子「アジア欧州会合(ASEM)における市民社会の役割」『国際協力論集』21(1)pp.67-93, 2013. 査読無

— Makiko Nishitani, "Transnational Strategies for Norm Creation through Reputational Dynamics" *Journal of International Cooperation Studies*, Vol.19, No.1, 2011, pp.29-64. 査読無

— Mariko Shoji, "The United Nations Global Compact and Peace: Guidance on Responsible Business in Conflict-affected and High-risk areas: A resource for companies and investors," 『敬愛大学国際研究』第25号, 2011年. 査読無

— 足立研幾「通常兵器分野の軍縮・軍備管理 レジーム密度上昇とそのインパクト」『国際安全保障』37巻4号, 2011年, 1-13頁. 査読有

— Mariko Shoji, "The Responsibility to Protect (R2P): the international community and responsibility," *The Keiai Journal of International Studies*, vol.23, pp.115-131, 2010. 査読無

— 宮脇昇「C S C Eを通じた人権問題の争点化」『国際政治』, 157号, 2009年, 129-141頁. 査読有

— Toru Oga, "Open Regionalism and Regional Governance: A Revival of Open Regionalism and Japan's Perspectives on East Asia Summit," *Interdisciplinary Information Sciences*, vol.15-2, , 2009, pp. 179 - 188. 査読無

— 西谷真規子「規範カスケードにおける評判政治(下)」『国際協力論集』16巻2号, 93-120頁, 2008年. 査読無

[学会発表](計 14 件)

— Makiko Nishitani, "Coordination through Overlapping Networks: Increasing Effectiveness in Decentralized Global Governance," International Studies Association Annual Convention, Toronto, March 26-29, 2014. Hilton Toronto.

— 高橋良輔「国家主権のアイロニー：三つのアポリアへの遊行」日本政治学会, 2013年9月13日, 北海道学園大学。

— 高橋良輔「動的平衡としての世界秩序? : 社会的エントロピーと政体構成」社会思想史学会, 2013年10月27日, 関西学院大学。

— Sugita, Yoneyuki, "Rise of Hybrid Norms in the East Asia: Japan's Security Policy in the 1950s," Symposium: Asia - from a

- Norm-Taker to a Norm-Maker, August 15, 2013, University of Turku, Finland.
- Makiko Nishitani, “Tackling Dilemmas in the Norm Implementation: Multi-layered Hybrid Advocacy Network in Anti-Corruption Movement,” International Studies Association Annual Convention, April 3, 2012, San Diego.
- Kenki Adachi, “Countering Norm Creation: Tug-of-War between Norm Entrepreneurs and Norm Protectors on Access to Essential Medicines,” International Studies Association Annual Convention, April 3, 2012, San Diego.
- Mariko Shoji, “Responsibility to Protect, Human Security and East Asia--A diagrammatic approach to the UN peace and security notions,” Japan Association for United Nations Studies (JAUNS), 2011年12月16日, 大阪大学.
- Kenki Adachi, “Institutional interplay and the development of conventional weapons governance,” ISSS -ISAC Annual Conference 2011, October 14, 2011, Irvine, CA, USA.
- Yoneyuki Sugita, “U.S. Military Commitment to Japan and Origins of Japan’s Constrained Rearmament: Significance of the Dodge Line,” International Symposium on the Association for the Study of Political Society (ASPOS), 2011年9月19日, 同志社大学今出川校地(新町キャンパス)臨光館2階.
- Makiko Nishitani, “Transnational Strategies for Better Global Governance,” International Studies Association, 16 March 2011, Montreal, Canada.
- Mariko Shoji, “Norm creating process of “Business and Peace”: United Nations Global Compact and Corporations” International Studies Association, 16 March 2011, Montreal, Canada.
- Yoneyuki Sugita, “Asian Nexuses: US Relations with Japan and the Korean Peninsula after the 9.11 Terrorist Attacks,” Workshop: The European Institute of Japanese Studies, 21-22 August 2009, Stockholm, Sweden.
- 高橋良輔「トランスナショナル公共圏の理論と実践 NGO外務省定期協議会をめぐるポリティクス」日本平和学会、2009年6月14日, 恵泉女学園大学.
- 宮脇昇「NGOと国家の対立 プーメラン効果の限界」日本政治学会、2008年

10月11日, 関西学院大学。

- 〔図書〕(計 8 件)
- 足立研幾『現代日本の NPO 政治』(共著) 第 8 章「NPO 法人格の積極的利用者? 世界志向 NPO の活動・存立様式」(239-256 頁)担当、木鐸社、2012 年、229 頁。
- 足立研幾『エティック国際関係学』(共著) 第 5 章「グローバル化時代の政府間関係」(85 - 102 頁)担当、東信堂、2012 年、278 頁。
- 高橋良輔『臨床知と徴候知』(共著)所収「グローバルな政治空間の徴候診断: デモクラシーとコスモポリタニズムの葛藤」, 作品社、2012 年。
- 高橋良輔『政治の発見 8 越える 境界なき政治の予兆』(共著)所収「国境を越える社会運動と制度化される NGO ネットワーク: 空間・運動・ネットワーク」42 頁、2011 年。
- 庄司真理子・宮脇昇編著『新グローバル公共政策』, 晃洋書房、2011 年、229 頁。
- 足立研幾『レジーム間相互作用とグローバル・ガヴァナンス 通常兵器ガヴァナンスの発展と変容』2009 年、有信堂高文社、232 頁。
- 庄司真理子『地球社会の変容とガバナンス』(共著)所収「グローバル化と国連規範の現代的展開 国連グローバル・コンパクトを事例として」中央大学出版会、327 頁、2009 年。
- 大賀哲・杉田米行(編)『国際社会の意義と限界 理論・思想・歴史』国際書院、357 頁、2008 年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西谷 真規子 (NISHITANI, Makiko)
神戸大学・国際協力研究科・准教授
研究者番号: 3 0 3 0 2 6 5 7

(2) 研究分担者

・庄司 真理子 (SHOJI, Mariko)
敬愛大学・国際学部・教授
研究者番号: 2 0 1 9 2 6 2 7

・杉田 米行 (SUGITA, Yoneyuki)
大阪大学・言語文化研究科・教授
研究者番号: 0 0 2 1 6 3 1 8

・宮脇 昇 (MIYAWAKI, Noboru)
立命館大学・政策科学部・教授
研究者番号: 5 0 2 8 9 3 3 6

・高橋 良輔 (TAKAHASHI, Ryosuke)
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号: 7 0 4 5 7 4 5 6

・足立 研幾 (ADACHI, Kenki)
立命館大学・国際関係学部・准教授
研究者番号: 7 0 3 6 1 3 0 0